



Title	ワン・ワールド・フェスティバル2025
Author(s)	中村, 安秀
Citation	目で見るWHO. 2025, 93, p. 10-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102830
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ワン・ワールド・フェスティバル2025



日本WHO協会理事長・国際ボランティア学会会長

中村 安秀（なかむら やすひで）

小児科医。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）パキスタン事務所でアフガニスタン難民の保健医療ケアに従事。以来、国内外の人道支援の現場に足を運んでいる。

はじめに

2025年2月8日（土）～9日（日）、西日本で最大級の世界とつながる国際協力の祭典である「第32回ワン・ワールド・フェスティバル」は、前年に引き続き、JR大阪駅から至近距離にある大阪梅田スカイビルで開催されました。外務省や国際協力機構（JICA）などの政府系機関、国際協力を実践しているNPO/NGOやボランティア、SDGsの達成に向けて活動している企業や大学、次世代を担う大学生や高校生（なかには中学生）が集い、さまざまな人びとが出会い、学ぶ場となりました。（写真1）



写真1 ワン・ワールド・フェスティバルの会場

日本WHO協会は、ことしもブース展示とセミナー開催に参加しました。以前にお世話になった方と再会できるいい機会となり、日頃からお世話になっている会員の方々に駆け付けていただき、新しく協会の活動に関心をもつていただく方と出会う場ともなりました。この場を借りて、会場にお越しいただいたすべての方に厚く御礼申し上げます。

ブース出展の常連さんの仲間入り

日本WHO協会が初めてワン・ワールド・フェスティバルに参加したのは、2019年2月でした。初めてのブース展示を前にして、来場者の方に見ていただく資料やチラシやパネルを準備して揃えるだけでも大変でした。同時に、「羽ばたけ！国際保健医療の世界へ!!」というセミナーを開催し、いままで支援してきたWHOインターンの方々に登壇していただきました。WHOおよび当協会の活動を多くの市民に直接伝えることができ、国際協力を行う様々な団体と触れる貴重な機会となり、交流を深めることができました。

それ以降、毎年、ワン・ワールド・フェスティバルにはブース展示とセミ

ナー開催の形で参加しています。とくに、大阪梅田スカイビルに会場が移ってからは、交通の便もよくなり、少しでも国際協力に関心のある方も気軽に会場を訪れるようになり、参加者のすそ野が広がった気がします。（写真2）

2025年も、事務局スタッフとともに、多くのサポーターの皆さんが駆け付けていただきました。初日のブース展示の飾付けを終えると、近隣のブースのおなじみの団体さんへのあいさつ回り。まだまだ数回目の若葉マークの参加にすぎませんが、いろんな団体の方から「お元気でしたか？ ことしもよろしく！」と声をかけていただき、気分は常連団体さんの仲間入りでした。

毎年進化するグローバルヘルス・クイズ

多くの国際協力団体では、アジアやアフリカの住民が作った工芸品やフェアトレード製品を、ブースで販売しています。ただ、日本WHO協会のコンプライアンスとして、特定の商品について、その品質や機能等をWHOに関連づけて認定・推奨する活動は一切行わないという方針を厳守しています。そのような状況の中で、2023年より、ブースを訪問していただいた方々を対象に「グローバルヘルス・ク



写真2 日本WHO協会ブースの前でスタッフ、サポーター、講師の方々と

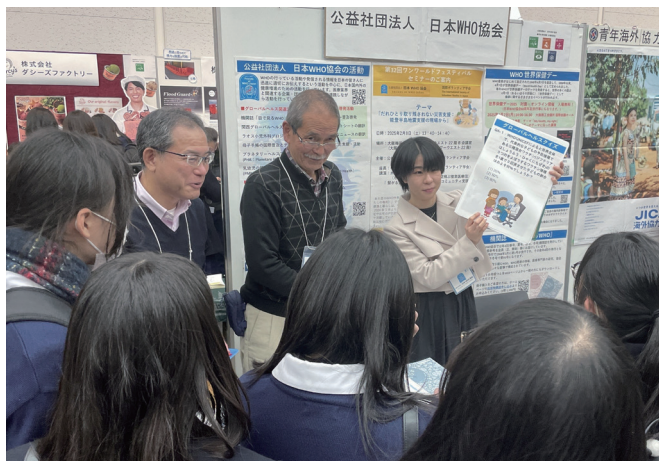


写真3 ブースで行ったクイズには多くの来場者が参加してくれた
(クイズを出しているのは、左から、木下英樹事務局長、安田直史理事、石上美桜さん)

イズ」を開催してきました。

クイズが始まる時間になると、ブースの前に多くの方々が集まってくれます。なかには、スタッフが声をかけて団体で参加してくれた中学生の子どもたちもいました。中学生や高校生の皆さんの豊かな知識とクイズへの関心の高さに驚かされました。最も多く正解した人には、「医療者応援はがきカレンダー 2025 年版」をプレゼントさせていただきました。(写真3)

クイズの内容も、毎年のように改訂され、洗練されてきました。正解は、13 ページの下段にあります。

「世界の人々の平均寿命は、およそ何歳でしょうか？」

(1) 50 歳 (2) 60 歳 (3) 70 歳

「WHO が設立されたのはいつでしょうか？」

(1) 1923 年 (2) 1948 年 (3) 1973 年

My health, my right

(わたしの健康、わたしの権利)

WHO が提唱した 2024 年の世界健康デーのテーマは「My health, my right (わたしの健康、わたしの権利)」でした。その理由として WHO が特記したのは、紛争と気候変動でした。

紛争は人々の生活に壊滅的な打撃を与え、死や痛み、飢え、精神的苦痛をもたらしています。同時に、化石燃料の燃焼は気候危機を引き起こし、きれいな空気を吸う私たちの権利を奪いました。

歴史を振り返ると、1948 年に発効した WHO 憲章では次のように明記されていました。「人種、宗教、政治信条や経済的・社会的条件によって差別されることなく、到達しうる最高水準の健康に恵まれることは、あらゆる人々にとっての基本的人権のひとつです。」(日本 WHO 協会記)。WHO 憲章では、健康とは基本的人権であるという概念を提示したうえで、各国政府には保健医療サービスの提供だけではなく、社会的施策を要求していました。

2024 年度の「関西グローバルヘルスの集い (KGH)」では、まず人権について学び、「紛争・戦争と健康権」と「気候変動と健康」という側面から深く掘り下げたオンラインセミナーを開催してきました。そして、2024 年 9 月の日本国際保健医療学会・学生部会 (Jagh-s) と共同開催したセミナーにおいて、学生の皆さんが選んだテーマが「国際保健と災害：国際保健の視点から考える、災害対応と被災者の健康」でした。

これらの活動の延長線上として、災害大国である日本において、「2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震で被災された方々の健康と暮らしは、守られていたのか？」という疑問が湧いてきました。そんなわけで、世界健康デーのテーマ「わたしの健康、わたしの権利」に沿った形で、能登半島地震をテーマにセミナーを開催することになりました。

セミナー

「能登半島地震支援の現場から」

2024 年に引き続き、2025 年も国際ボランティア学会との共催の形で、セミナーを開催することができました。国際ボランティア学会監事の山口洋典さん (立命館大学) と学術大会長の桑名恵さん (近畿大学) に紹介いただき、素晴らしい講師にご登壇いただくことになりました。(図 1)

看護師の木下真由香さん (ピースウィンズ・ジャパン、空飛ぶ搜索医療団 "ARROWS") は、2024 年 1 月より NPO スタッフとして石川県珠洲市に常駐してきた経験をもとに、「繋がる支援：被災者と歩む健康とコミュニティ支援」について発表しました。当初は巡回診療の補助や避難所巡回のサポートを行い、その後は仮設住宅や在宅



写真4 木下さんのセミナー講演風景



写真5 熊谷さんのセミナー講演風景

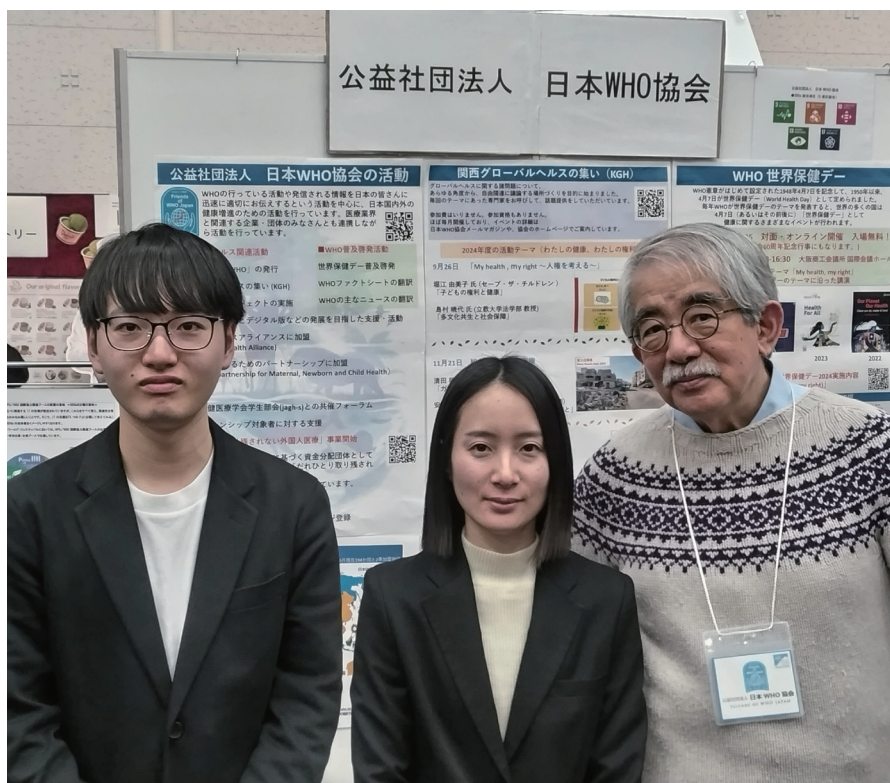


写真6 セミナー後に、登壇者との記念撮影
(左から、熊谷朋也さん、木下真由香さん、中村安秀)

の戸別訪問、コミュニティ支援のための茶話会の開催など、被災者のニーズの変化に合わせたきめ細かな支援に携わってきました。被災地支援の最前線で、住民の目線を大切にしながら、仮設住宅に引きこもってしまわないように、楽しく外出できる機会を増やすといった工夫を続けました。住民と協力して開催した納涼祭において、被災後初めて住民の方のはじける笑顔を見たという言葉が印象的でした。私自身、日本の農漁村では、復興の過程で地域のお祭りが果たす役割の大きさを肌身で感じてきたからです。(写真4)

関西学院大学法学部学生の熊谷朋也さんは、神戸のNPO団体の1級建築士の方の指導を受け、石川県穴水町において被災した街並みの姿を復元して思い出を残すジオラマ制作を行いました。

た。また、被災住宅の調査の手伝いを行い、被災したお寺の庭や墓石の修理を手伝い、地元の方からボランティアに来てもらってよかったという言葉を送っていただきました。一方、関西からボランティアで通う際の交通費や宿泊費が大変なので、何らかの支援があればありがたいという切実な要望も聞かれました。(写真5)

会場からは、被災者の栄養状態や、外国人の被災者の現状などに関する質問が出されました。参加者からは、メディアでもなかなか聞かれない被災地の現状がよく理解できた、被災地においてボランティアのニーズが高い状況がよくわかった、といった声が聞かれました。30年前に阪神淡路大震災を経験した方からは、若い方がボランティアにがんばっている姿を見て、30

年前を思い出し感動したといったメッセージもいただきました。

復興までの道のりは長く、被災者の方々の不自由な生活は続きます。「必要な人に必要な支援」を届け続けるためには、被災地に寄り添う、長期的な視野に立った支援が必要とされていることを痛感しました。(写真6)

2025年は、第32回ワン・ワールド・フェスティバルのテーマ「共に生きる世界を〜今こそ思う みんなのいのち〜」に沿った内容のセミナー開催やブース展示になり、いろんな方々との出会い学びの貴重な機会となりました。来年も参加を予定していますので、ぜひ気軽に日本WHO協会のブースまでお立ち寄りください。

第32回ワンワールドフェスティバル

セミナー・テーマ

「だれひとり取り残されない災害支援： 能登半島地震支援の現場から」



日時：2025年2月8日（土）13：45—14：45

場所：大阪梅田スカイビル・タワーウエスト 22 階

主催：公益社団法人日本WHO協会、国際ボランティア学会

【プログラム】

1. はじめに（中村安秀：日本WHO協会理事長、国際ボランティア学会会長）

2. 講演：木下真由香さん（ピースウィンズ・ジャパン、空飛ぶ搜索医療団“ARROWS”）

「繋がる支援：被災者と歩む健康とコミュニティ支援」

3. ボランティア報告：熊谷朋也さん（関西学院大学法学部法律学科）

4. 会場参加者との質疑応答

【趣旨】

2024年度のWHO世界健康デーのテーマは「My health, my right（わたしの健康、わたしの権利）」でした。2024年1月1日に発生した能登半島地震で被災された方々の健康と暮らしは、守られていたのでしょうか？

ワンフェスの会場で、「だれひとり取り残されない災害支援」をみんなで考えていきたいと思います。どうぞ、気軽に参加してください！

図1 セミナーの案内ポスター

*クイズの正解は、下記の通りです。

「世界の人々の平均寿命は、およそ何歳でしょうか？」

(3) 70歳

「WHOが設立されたのはいつでしょうか？」

(2) 1948年